

---

# 雪をすくう温かい手

てりこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪をすくう温かい手

### 【Nコード】

N7661F

### 【作者名】

てりこ

### 【あらすじ】

姉御肌の大学生、小雪こゆきはクリスマスを前に彼氏に振られてしまった。心は未練たっぷりでも平然を装っていたが、ただ一人、久史ひさしの前では強がってばかりもいられずに……。弱さからくる錯覚を恋だなんて思いたくない」

秋は物悲しい季節、別れの季節って言うよね。

別れと言えば春もそうだけど、卒業とかが絡んで、なんとなく温かい風も吹いてて、まだ未来ある別れっぽくて、わたしは嫌いじゃない。でも秋の別れって最悪。景色はさびしいし、風が冷たい。寒い日なんて木枯らしっぽいでしょ。冷たいよ。体が冷える上に心までいてつきそう。

「なんで、って、……うん、小雪のこと嫌いになったわけじゃないけど。あえて言うなら“女性”として見れなくなってるっていうか」目の前の男が、冷たい言葉を遠慮のかけらもなしに吐き出している。申し訳なさそうに、頭なんて掻いて。

「判ったよ。もういい。じゃ、さよなら」

それ以上聞きたくないから、あっさりとかえぎってやった。ぷいと後ろ向いて、そのまま置き去りにしてやった。

だからあいつは知らないね。わたしが泣いたなんて。本当はすり付いて「別れないでよ」って言いたかったなんて。

でもサークルではきつとまた会おうし、こじれたくない。別れはあっさりした方が、これからのためだ。

なんで、ふられた方がこんなこと気遣ってるんだろう？ ううん、理由は判ってる。また復活しないか、なんて淡い期待を持ってるんだ、わたし。嫌いになったんじゃないなら、そのうちまた、なんてね。

あああ、クリスマスの予定、空いちゃったなあ。

家に帰ったらもつとさびしくなった。だから、友達にいつせいにメール出した。誰かヒマな人いる？ って。

でもこういふときって、とことん間が悪い。みんな「ごめん。今日無理」って。しょうがない。気を紛らわせるためにゲームでしようか。

いつもは楽しいはずのアクションゲーム。今日はぜんぜん身が入らないや。やーめた。テレビでも見よう。

適当にリモコンでチャンネルを変えていると、携帯にメールが着信した。

『ヒマです。当日に呼び出なんて珍しいですね?』

あ、失恋の愚痴聞き犠牲者登場。ありがたく彼を呼び出すことにした。

あわれな犠牲者、遠藤久史えんどうひさしさんと落ち合ったのは居酒屋のチエーン店。

週末の夜とあって結構な賑わい。他の客は宴会やら打ち上げやらで盛り上がっている。いいなあ陽気に騒げて。

遠藤くんはわたしより二歳年下の二十歳。ずっと通っているサークルのメンバーの一人で、話が合う人だ。といっても趣味の話くらいしかしたことないけれど。

ハンサム、とは言えないかもしれないけど、人好きする顔だと思う。身長はわたしより十センチ弱高い。考えてみたら、横に並んで歩くにはけっこういいバランスだよな。

でもずっと友人で、恋愛感情を抱いたことはない。なんていうか、男女の仲になるより、友達にいるほうが楽な感じがして。彼氏、あ、もう元彼か、あいつと付き合っているときも結構気楽に話していたし。

「急に呼び出してごめんね」

席に通されて、座った瞬間に謝っておいた。だってこれから愚痴大会だもんね。

「いいよ。暇だったし」

にこやかな遠藤くん。……そんな顔されると、話しづらいなあ。

ところがこっちの気遣いなど一蹴する目の前の友人。

「デート、ドタキャンされちゃった?」

「今日どころか、未来永劫、キャンセルされちゃったよ」

あつけらかんと言ったつもりだったけど、遠藤くんは「え？」と言った後に心配そうな顔つきになっちゃった。つらそうな顔していたのかなあ。

「別れちゃったのか。……なんで？」

「ふられちゃった。女として見れないんだって。まあしょうがないか、こんな性格だしさ。かわいげないよね。だいたい、苗字がいけないわ。東郷<sup>とうきょう</sup>なんて強そうな響きだしさ。名は体をあらわすってあつてるよね。ニツクネームも『ゆきねえ』でしょ？ もうアネゴ肌バリバリで、さ」

一気にそこまで話して、悲しくなってきた。そんなわたしでも、あいつの前では女の子しているって思ってた。そういうところを好きになつてくれたんだって。それなのに、否定されちゃったよ。

あ、ああ。ダメだよ、こんなところで泣いたら。呼び出されて、愚痴聞かされた上に泣かれちゃ遠藤くん迷惑だよ。

だつたら黙ればいいんだろうけど、ここで言葉切っちゃったら余計に泣けてきそうだし。

「でもさあ、何もこんな薄ら寒い季節に別れんでもいいと思わへん？ ……あ、そうか、もうすぐわたしの誕生日だし十二月はクリスマスだし、きつとプレゼントとか面倒くさくなつたんだ。だからこの時期に――」

必死にこらえて、笑顔で話してたけど、もう限界。

ぼろ、っと、涙が右目から溢れ出てきた。次の瞬間には左目からも。

「あ、あらら？ ちょっと、やだ。ゴメン。……何やってんだろ、わたし……」

笑顔を顔に張り付かせながら、あたふたとハンカチを探すわたしの姿はさぞこっけいだろう。呆れちゃったよね遠藤くん。

震える手でハンカチを出してきて目に押し当てた。しばらくそのまま声を殺して泣いた。

遠藤くんは何も言わない。きつと困ってるんだろうな。

「ゴメンね。こんなんやから、ふられるんだよね。らしくないよね」  
そう言って顔を上げた。怒ってるかなと思っていた遠藤くんは、  
予想に反して心配そうにこっちを見ていた。

「ゆきねえ、無理しなくていいよ」

優しさが、とつても心地よく感じた。だから余計に迷惑かけたく  
なかった。こんな時に素直に泣かないのはやっぱりかわいげないん  
だろうけど。

「ううん。もういい。聞いてもらって、ちょっと泣いたら、すつき  
りしちゃった」

「本当に？」

「ほんとほんと。それにさ、あのまま泣いてたら遠藤くんが誤解さ  
れちゃうよ？ 恋人の痴話喧嘩って。そんなん嫌でしょ？」

茶化してやると、遠藤くんは苦笑いした。

「それは、……うん、そうやねえ……」

ほら、やっぱり迷惑じゃない。あいまいにしちゃってるのが優しい  
男たるところだけだ。

「ってことで、この話、おしまい。せつかく飲みにきたんだから楽  
しい話しょ？」

優しい友人は、わたしの言葉にうなずいて笑った。

結局、愚痴はちよつとの間だけで、その後二時間くらいは、いつ  
ものように趣味の話で盛り上がった。

失恋の痛手の中にいるときでさえ、他人に気を遣うわたしって、  
やっぱり名前のとおり強くて、姐御肌なんだなとつくづく思った。

ヤツにふられてからちょうど一週間後が次のサークルの活動日だ。  
この一週間、正直言って空元気だけでやり過ごしてきたって感じ  
で、まだ全然心の整理はついていないんだよね。

でもヤツのこと引きずってるから来ないんだ、なんて思われるの  
も悔しいから、行くことにした。

ヤツは、なんか普通に話し掛けてきたりで、何を考えているんだ

か判らない。全然わたしには未練がないってこと？ まあそうでなければふったりしないんだろっけど、ちよつとは気まずく思わないのかな。

何人かは、わたしとヤツが別れたかもって気づいたみたいで、コッソリと聞いてきた人もいる。平気なふりして「理由はあつちに聞いてよ」って話ふってやった。ちよつとは困れ。

でもヤツは、まったく困っている様子もなく「なんとなく」なととやり過ごしている。

なんとなくで別れられたのか、わたしは。

むかつ腹がたつたので、トイレに立った。

顔をぺちぺちと叩いて、気合の入れなおし。油断したらついついヤツを目で追ってしまう。もちろんやり直したいけど、今そんなそぶりを見せちゃダメだってことは、過去の失恋で経験済み。

元々化粧っ気はそれほどないんだけど、泣かないためにと今日はちよつとがんばってメイクしてきた。友達に言ったらきつと化粧の目的が違つとツツコミが飛んでくるんだろうな。何せここは大阪の大学。ツツコミならまかせとき、って子は、そこらへんにゴロゴロしてるし。

その、ツツコミどころ満載の気合メイクをちよつと直して、みんなのところに戻るうと思つた。

「で、実のところなんでゆきねえと別れたん？」

廊下で、遠藤くんの声がする。思わずまたトイレにひっこんで聞き耳を立ててしまうわたしは悪い女だな。

「実はさ、新しい彼女ができてさ。ゆきねえは嫌いやないけど、彼女と比べたら色気なくて。だからまあ言っちゃえば乗り換えたつてところ」

ヤツが笑いを混ぜて答えてる。

ああそういうこと。いいよ別に。女の子らしくないことは自覚してる。それに関してはもうあきらめの境地というか。こっちにも「非」はあるわけで。

微妙に二股かけられていた時期があるのは腹が立つけど。

「ゆきねえだつて、十分女の子してると思うけどな」

遠藤くんがフォローしてくれてる。ありがと。やっぱり優しいよね。

「え〜？ ヒサ、ひよつとしてゆきねえのこと好き？ 今フリーやし狙ってみたら？ と言つても、ふられたつてのに、むっちゃサバサバしてる人やから手ごわいと思うけどね。ま〜がんばれよ」

かちん、ときた。

でもここで飛び出すのも気まずいかなと踏みとどまる。盗み聞きはもつと気まずいんだけど……。

「おまえな、ゆきねえは……」

遠藤くんは怒ったような声で言いかけて、とめた。何を言いたかつたんだろつ。

「おまえさ、彼女のどこ見て付き合つてたん？」

気を取り直したかのような遠藤くんの問いかけ。

「どこ、つて……。改めて聞かれると困るなあ。彼女から告つて来たわけやし、嫌いじゃなかったから。まあ、楽しかったよ。いい退屈しのぎにはなつたかなあ」

……最低。百年の恋もいっぺんに冷める言葉だ。それどころか腹が立ってきた。かわいさあまって憎さ百倍とはよく言つたものだ。

「サイテーだな、おまえ」

遠藤くんの声が、また怒っている。まるでわたしの心を代弁するみたいに。

「あ、やつぱり好きなんやな〜。そんなにムキになつて」

ヤツは相変わらずへらへらと笑つてるみたい。

もう、我慢限界！

飛び出そうとしたとき、鈍い音がして、また足を止めた。

「い……つてえ！ なんだよ、殴ることないやろつ！」

ヤツが怒鳴る。遠藤くん、あいつを殴つたんだ。

……なんか、不謹慎だけど、うれしいと思つた。



「人の気持ち踏みにじつといて平気な顔しているおまえが悪い。ゆきねえ、きつとおまえの今の言葉聞いたら、おんなじふうにしただらうな」

そのやり取りを最後に、遠藤くんが離れていく。あとには、そこらを蹴りまくって怒りを発散しているヤツがいた。

こんなアホに心許してたんだわたし。がっかりだよ。

サークルの部屋に戻ったけど、とてもじゃないけど今日はこれ以上遊ぶ気になれない。友達には「気分が悪くなったから帰る」とだけ伝えて、荷物をまとめて部屋を出た。

それからしばらく、いらいらしたり、落ち込んだり、精神的に落ち着かなかった。卒業論文やレポートの作成に忙しいという理由でサークルにも顔を出さないで、このままフェードアウトかなあ、なんて思っていた。

遠藤くんとヤツとのやり取りはサークルの中でうわさになったらしい。女友達がこっそり教えてくれた。なのでますます出づらくなってしまった。サークルのみんなは遠藤くんの言い分が正しいって言うてくれているみたいで、ヤツも参加しなくなってきたいるみたいだ。

日ごろの鬱憤の発散場所だと思っていたサークルの人間関係で、こんなことになったのは悲しいけれど、しょうがないよね。

遠藤くんと会って、あのときのことのお礼を言いたい。そんなふうに怒ってくれて、うれしかったって。でもやっぱり、今は無理っばい。

女友達は、わたしが荒れているから慰めようとしてくれているのか。たまに遊びに連れ出してくれる。ああこういう時に友情のありがたさを痛感する。

携帯にメールが着信した。また女友達からだと思じて疑ってなかったので差出人の名前を見て驚いた。

遠藤くんだった。「今日ヒマなら会いませんか？」って。

どうしよう。ヒマだけど……。でも何の用だろう？

たつぷり五分くらい悩んでから、返信。

「とりあえずヒマだよ。珍しいね当日に呼び出しなんて?」

すぐにメールが返ってきた。この前の居酒屋に行こうというお誘いだった。

会えるんだ。……なんだかほつとしている自分に気づいて、首を振った。

気にしているけど、これは恋じゃない。だってわたし、まだあいつとのこと、引きずってる。そんな時に優しくしてくれたから、ちよつと甘えているだけ。

とにかく行かなきゃ。身支度して家を出た。

居酒屋の前に着くと、中から相変わらず陽気な騒ぎ声が聞こえてくる。まあ本来それが当たり前なわけで。

遠藤くんはわたしを見るとこつと笑った。いつもみんなと遊んでいるときとおんなじ顔だ。とりあえず安心した。

中に入って、席に通される。偶然にも、この前の同じところ。あのときのことか思い出されてなんだか複雑。違う席がよかった。いや、どうせなら違う店がよかったのだがそれは考えないでおこつ。

「ごめんね急に呼び出して」

あの時とは逆で、遠藤くんから声がかかる。

「いいよ、どうせヒマだったし。で? どうしたの? 今度は遠藤くんの愚痴大会かな?」

彼がいつもの様子なので、わたしも調子を合わせてにいつと笑ってやると、遠藤くんは笑いながら首を振った。

「ゆきねえ、誕生日もうすぐだろ? はい。これプレゼント」

……へっ?

予想外の展開に固まってしまった。

「あ、あゝ。ありがとぅ」

思考回路が復活したので、お礼を述べて受け取った。どれくらい沈黙していたんだろう。遠藤くんがちよつと怪訝な顔をしているよ。

「あはは。誕生日なんか忘れてた」

茶化して言うと、遠藤くんは「あつ」というような顔をした。ひよっとして、ヤツのことを思い出させてしまったとも思ってるのかもしれない。

うん。確かにそうだけど、なんていうか、未練じゃなくてむかつ腹というか。遠藤くんじゃなくて、本当にわたしが一発殴っておけばよかったって思ってる。

あ、そういや、この前のお礼……。でもこの話の流れでいきなりその話もないか。

「なんだろ？ 開けていい？」

とにかく今は暗い雰囲気にもっていきたくなかったし、実際に、身に興味があつたから聞いてみた。遠藤くんがうなずいたのを見て、包みを開けてみた。

……ゲームソフト。前から興味のあつたやつ。

うれしい。うれしいけど、女性への誕生日プレゼントとしては、どうよ？ まあしかし所詮は友達だしね。ちょっとは期待したんだけど。

期待？ 期待ってなにを。だから、友達だよわたし達は。

などと瞬間的にぐるぐると考えるわたしは、結構失礼なやつだと我ながら思ってしまった。

「おお、ほしかったやつだ。ありがとう遠藤くん」

ということで、最初に感じた喜びを素直に表現してみた。

「あ、よかった、あつた」

遠藤くんが、にこつと笑う。わたしが、ちらつとだけ好きだといっていたソフトのこと、一生懸命思い出してくれたんだね。改めて彼の優しさを見た。

「覚えていてくれて、うれしいよ。誕生日も、ゲームのことも」

「ゆきねえの誕生日って、そろ目だから覚えやすいんだよね」

照れたように遠藤くんが言う。その表情に、どきつとした。

何をときめいてんだ。やっぱり人の優しさに耐性低くなってるな、

わたし。

「そうだよ。月日も覚えやすいよね。わたしの名前ね、誕生日がちようど小雪こゆきって言う二十四節気の日で、そこから取ってきたんだって」

弱さからくる錯覚を恋だなんて思いたくない。とにかく今は自分を立て直さないと。いつもの自分を取り戻すんだ。

「へえ、そうだったんだ。小雪こゆきって名前、かわいい響きだよ」

って、いきなり決心くじくようなこと言われたよ。

「名前はかわいい響きでも、苗字がね。東郷小雪こゆきってアンバランスだと思うよ。もっぱら、苗字の力強さがわたしのシンボルだよ。……まあ名前まで力強かったらそれこそ女捨てないといけないかも、だけ」

えへへ、と笑うと遠藤くんも笑った。

「またゆきねえはそんなふうに言う。ゆきねえだって、女の子らしいよ」

「ありがと」

ちよつと、なに？ 期待するようなこと次々言われちゃってるよ。ここはごまかしておかないと、錯覚を信じちゃうよ。

「遠藤くんは？ 久史だよ」

「うん。『幾久しく』って意味をこめたって。『し』は、司るっていうのと迷ったらしいけど」

「幾久しく。いつまでもっていう意味？」

「そうそう。人にいつまでも一緒にいたいって思われるような人になっただけだよ」

「じゃあ、遠藤くんにぴったりだね。友達多いし」

「そうかな」

うん。こうやって取り留めのない話して、楽しくしているのが今のわたしにとって、一番の活力だ。

ありがと遠藤くん。この恩は、いつかなんかの形で返さないとね。

楽しい時はあつという間に過ぎて、そろそろ家に帰らないといけない時間になった。

「それじゃ、遠藤くん、プレゼントありがとう」

「うん。気に入ってもらえてよかったよ」

「楽しかった。また会ってくれる？」

すらすらつと出た言葉に、はつとなった。

そうか、これ、やっぱりわたしの本音なんだ。遠藤くんも、もっと親しくなりたい。

自覚して、顔がほてってきた。

「うん。また遊ぼう」

そんなわたしの心の変化はきつと伝わってないね。遠藤くんは軽くうなずいた。

それから、しばらくの間は友達よりも遠藤くんと遊ぶ機会が多くなった。まあ遊ぶといっても、ちよつと大学の帰りにお茶したり、だけど。

なんというか、彼といるととてもリラックスできるんだよね。だから、無理なく自分を取り戻すことができそうで。

遠藤くんはきつと、ふられたばかりの哀れな女に同情して付き合い続けていてるんだろうな。だって、さり気なく「好きな子とかいたら、ちゃんとわたしの誘い断つてよ？」って聞いても、「ゆきねえが復活するまではお付き合いするよ」なんて言われたし。

好きな人、いるのかな？　いくらなんでもそれだったらわたしの誘いは断るよね。こんな、カップルが生まれるチャンスな時期に、誤解されたくないだろうし。

まあいいや。とにかく今は、ちよつとでもたくさん会って、楽しい時間をすごすんだ。

ということとで今日も、大学の帰りに遠藤くんとお茶する約束になっている。大学から繁華街までわりと近いので、ちよつと疲れた体もすぐにいすに落ち着けることができた。

取り留めのない話をしながら、窓の外を見るとすっかりクリスマスモード。さすが十二月半ばだけはある。ツリー、イルミネーション、ディスプレイの中もガラスにスプレーで描かれたイラストも、すべてがいやみなくらいにクリスマスだ。あと十日もすれば繁華街どころかそこらへんカップルだらけだねきつと。

ちよつと、さみしいかな……。今のところ、遠藤くんとそんな雰囲気になれそうにないし。

「あ、……もうそろそろ出たほうがいいよね」

時計を見て、遠藤くんが気を遣って言うてくれているので、うなずいた。

本当は、もうちよつと一緒にいたいんだけど。

……はっ。だめだめ。贅沢言っちゃ。こうして会えてるだけでも幸せなんだよね。

心の中でひそかに自分に言い聞かせながら、繁華街を抜けて駅へと向かう。

住宅街のそばを歩いているときに、遠藤くんがぼそつとつぶやく。

「それにしてもさ……、やっぱり十二月も半ばになると、どこもクリスマスモードだね」

「え？ あ、うん、そうだよな」

答えながら、なんかおかしくなった。普通そついうせりふはもつとそれらしく飾り付けてある場所と言うものじゃない？ 一応、クリスマス用に電飾とか飾っている家もあるけど、全体的には結構殺風景だよここ。

でも笑っちゃ悪いのでごまかすために付け足した。

「クリスマスかあ。今年はつまない日になりそうだよ。イブなんて日曜日なのにな」

ま、でも、卒論とかで忙しいからいいか、と言いかけたが、その前に遠藤くんの信じられない一言が聞こえてきた。

「じゃ、二十四日は、二人で遊びに行こうか」

え？ 今、なんて？ 二人でつて、それつて、デート？ イブに？

でも待つて、二十四日って言ったよね。お互い独り身だし、わたしはふられたばかりだからって、同情票？

などと頭の中で考えながらも、口では即刻OK出してるわたしがいた。

どうして？　どういうつもりで？　その一言が聞けなかった。

変に意識されるのがいやだった。そう問い返して、改めて考えられて、やっぱりやめるといわれるのがいやだった。会わないくらいなら、友達感覚でもいいから一緒にいたい。

わたし、遠藤くんが、すごく好きなんだ。

クリスマスイブ当日まで、まあそれはいろいろと考えた。考えれば考えるほどに好きなんだと自覚しては舞い上がり、でもきつと遠藤くんはわたしのことを友達以上には思っていないだろうと考えては切なくなつて。

でも、これからだね。なんたつて、気づいたばかりだもん。いい具合に仲良くやつてるから、これからもっと距離を縮めていけばいいじゃない。

イブの朝、外に出ると、夜中に雪が降ったらしくて日陰にはまだ小さな雪の塊が残っている。ホワイトクリスマスと呼ぶには頼りない量だろうが、これだけでも結構喜んじゃうものなんだよね。カップルは。ああ、早くその仲間入りがしたいよ。

さて、フレアのワンピースとコート、化粧もちよつとして、いつもよりはおめかし状態で出かけた。デート、と呼べるかどうかもなぞだけど、とりあえず京都の三条で映画を見ることになっている。

遠藤くんは長袖シャツとジーンズ、ハーフコートという、いつもと変わらない格好。まあそりゃそうだね。デートっていうより、休日の暇つぶしなんだろうから。

映画はアクションもので、カップルが好んで見に行くようなものじゃない。こういうところも、やっぱり友達としてしか見られてないなあ。さびしい。

でも十分に楽しめた。笑いあり、ハラハラドキドキのストーリーとアクションにすっかり引き込まれて、映画の後のお茶の席で、遠藤さんと大いに盛り上がる事ができた。

うん、今はやっぱり楽しけりゃいいや。そのうち、ゆっくりと距離つめちゃうぞ。

喫茶店を出て、どこに行こうかという話になった。

「とりあえず、人が多いし、河原歩こうか」

遠藤くんが言う。確かに、大通りの歩道はいつもよりたくさん人でごったがえしている。そろそろ夕暮れも近づいているとあって、カップルや友人グループなどが浮かれた様子でゆっくりと足を進めている。

加茂川の河原は整備されてきたと言っても、結構歩きにくい地面だ。昨夜雪が降ったしぬかるんだり滑りやすかったりするところがあるかもしれない。本当ならあんまり歩きたくないけど、人ごみが苦手なわたしはうなずいて返した。

では早速とばかりに河原へと向かう。

河原へ降りて、地面がすっかり乾いていることにほっとしたが次の瞬間、そうだった、と思い出す。ここって、カップルの巣窟なんだよね。なぜか計ったわけでもないのに等間隔でカップルが腰を下ろしている。川に向かって座って、楽しそうに話をしていたり、人目をはばからずいちゃいちゃしていたり。

「あゝ。なんていうか。いつも以上に多いね」

茶化して言う。てつきり、遠藤くんも笑って返してくれるものだと思ってた。

なのに、急に歩くのがゆっくりになったかと思うと、真剣な顔になった。

え？ なに？ やっぱ後悔した？ 恋人でもないのに、二人で遊びに出るんじゃないかったとか。やっぱこれから二人で会うのはやめようとか、そんなふうに思ってる？

不安におののくわたしの顔をじっと見て、遠藤くんは、小さな声



で、言った。

「ゆきねえ……。おれら、ちゃんと付き合わない？」

「え。はい」

と即答で返事してから彼の言葉がじわりと胸に染み入ってくる。  
はい？ ……これは夢？ それとも都合のいい聞き違い？

でもそんな否定的な考えは、彼の笑顔が吹き飛ばした。

「あゝ、よかった……」

「えゝ。こっちこそ、ありがとう。うれしいよ」

「ほんと？ いや、とにかく、よかったゝ。あゝ。むちゃくちゃ緊張したっ」

そこまで喜んでもらえてとってもうれしいやら照れるやら。

五十メートルくらいそんなやりとりを繰り返して、今度はどうして好きになったのかとか、いつぐらいに意識したのかとか、お互いに暴露大会。

なんだ、遠藤くんも、二人で会い始めたところから気になってたんだ。ぜんぜん気づかなかった。彼もわたしの気持ちの変化に気づかなかったって、お互い、鈍いよね。

「そうだ、あのね、いまさらだけど、わたしがふられたすぐ後、サークルであいつのこと殴ってくれたでしょ？ うれしかったんだ、本当は。お礼言いたかったんだ。……ありがとう」

「あ、聞いてた？」

遠藤くんが照れている。

「うん。本当にうれしかったんだよ。わたしのことでそこまで怒ってくれて。考えてみたら、それがあつたから遠藤くんのこと意識したんだし……。でも、今日の約束のこと『二十四日』って言ったから、てつきりその気がないんだって思ってた気長に構えてたんだよ」  
「それは……。実は、あの約束を言い出すのだったてすごく緊張してて、クリスマスイブだなんて恥ずかしくて出てこなかったんだ」

照れ笑いする遠藤くん。ますます表情が崩れている。ああ、こんな顔してくれるんだ。うれしい。

ふと、遠藤くんが足を止める。彼の視線の先は、日陰になっていて、すこしだけ雪が残っている。河原の端っこで、でも存在を主張するように、白く輝いていた。

「雪。まだ残ってた」

遠藤くんはそう言うのと、近寄っていつて雪をそっとすくった。少ししか残っていなかった雪は、彼の手の中でゆっくりと溶けていく。完全になくなって、ただの水滴になったところで、顔を上げると遠藤くんもわたしを見ていた。

「ゆきねえ。……こんなとき、なんて言ったらいいんだろう。えっと、これから、よろしく。……小雪」

照れた様子の遠藤くん。最後にわたしの名前を呼ぶ声は小さかったけど、彼の気持ちは十分に伝わってきた。

だから、彼の手をぎゅっと握って、うなずいた。

「うん。幾久しく、ね」

彼の名前の由来になぞらえて、でも重くならないように冗談めかして笑うと、彼もうれしそうに笑った。

彼の手は、雪をすくった後なのに、温かった。

温かい、優しい手。

河原の隅にあった雪のように、縮こまって、それでも誰かに気づいてもらいたいと思ってた、わたしをすくってくれて、ありがとう。本格的に雪が降ったら、二人で雪だるま作りしたいな、と思った。

<了>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7661f/>

---

雪をすくう温かい手

2010年10月8日15時50分発行